

【宗祖法然上人御法語】

(第一) 難値得遇 なんちとくぐう

1

「それ流浪三界のうち、いずれの界さかいにおもむきてか釈尊の出世にあわざりし。」

さて、三界さんがいという迷いの世界に生死を繰り返してきた間、いったい、いかなる世界にさまよっていたがためにお釈迦さまの出現に巡り遭あわなかったのでしょうか。

2

「輪廻りんね四生のあいだ、いずれの生しょうをうけてか如来の説法をきかざりし。」

輪廻りんねして四生ししょうを繰り返していた間、どのような生を受けてきたがためにお釈迦さまの説法を拝聴することができなかつたのでしょうか。

3

「華嚴開講けごんかいこうのむしろにもまじわらず、般若演説はんによえんぜつの座にもつらならず、鷲峯説法じゆぶせつぽうのにわにもぞまず、鶴林涅槃かくりんねはんのみぎりにもいたららず。」

『華嚴經けごんきょう』をお説きになつた場にも加わらず、『般若經はんによきょう』をお説きになつた席にも座らず、靈鷲山りようじゆせんでのご説法にもうかがわず、お釈迦さまが涅槃ねはんなされる際の最後のご説法にも参りませんでした。

「われ舎衛しやえの三億の家にややどりけん。しらず地獄八熱のそこにやすみけん。」

私の前世は、お釈迦さまが過ごされた舎衛城しやえじょうに生まれながら、そのお名前さえ聞かなかつたという三億人の家に生を受けたのでしょうか。それとも八熱地獄の底にとどまっていたのでしょうか。

「はずべしはずべし、かなしむべしかなしむべし。」

ああ、なんと恥ずかしいことでしょう、あまりにも悲しいことではないですか。

「まさたしにいま多生たしやうこうごう広劫こうをへて、うまれがたき人界にんがいにうまれて、無量劫むりやうこうをおくりてあいがたき仏教にあえり。」

しかしながら、まさたしに今、幾度となく生死を繰り返しつつ永い時を経て、生まれ難いこの人間界に生まれてきたのです。そして、量り知れないほど長い時間の果てに、ついに遭あい難い仏教に出会うことができたのです。

「釈尊の在世にあわざる事は、かなしみなりといえども、教法流布きやうぽうるふの世にあう事をえたるは、是よろこびなり。」

お釈迦さまのご在世中、直接お会いできなかったのは確かに悲しいことですが、そのみ教えが広まっているこの世に生を受けたのは、実に喜ばしいことです。

「たとえば目しいたるかめの、うき木のあなにあえるがごとし。」

それはあたかも、大海にさまよう亀が、漂う浮き木の節穴にびたりと頭を突き出すほどの偶然なのです。

「わが朝ちように仏法流布せし事も、欽明きんめい天皇あめのしたをしろしめして十三年、みずのえさるのとし、冬十月一日はじめて仏法わたり給いし。」

そもそも日本にみ仏の教えが広まったのは、欽明きんめい天皇の御代みよになって十三年(西暦五五二年)の初冬、十月一日に仏教が伝来したのがその始まりでした。

「それよりさきには、如来きようぼうの教法も流布せざりしかば、菩提かくろの覚路いまだきかず。」

それ以前には仏教は広まっておらず、覚りへの道など聞くこともなかったのです。

「ここにわれらいかなる宿縁しゆくえんにこたえ、いかなる善業ぜんごうによりてか、仏法流布の時ときにうまれて、生死解脱しやうじげだつのみちをきく事をえたる。」

そもそも、いかなる前世のご縁によつてか、いかなる善根ぜんこんによつてか、いかにして私たちはみ仏の教えが広まっているこの時代に生まれ、生死の迷いの世界を離れ出る道をたずねることができているのでしょうか。

「しかるをいまあいがたくしてあう事をえたり。」

いずれにせよ今、現に、遭^あい難い中にもみ仏の教えに出会^あうことができたのです。